

イタリアのトマトの生産状況および トマト加工品の生産、輸出動向（前編）

調査情報部

【要約】

イタリアでは、トマト生産に適した気候からトマトの生産が盛んである。同国のトマト生産の9割は加工用トマトであり、その生産量は、米国に次いで世界第2位となっている。

加工用トマトから生産されたトマト加工品の6割は、EU域内、米国、日本を中心に輸出されている。近年、中東やアジアなどの新興国からの需要も高まっており、さらなる輸出拡大も予想される。

同国の南部では、統廃合による加工品生産業者の大規模化が進んでいる。一方、北部では、大企業が中心となり一般家庭向けを中心に販路を拡大している。

本稿では、前編として、イタリアのトマトとトマト加工品の生産状況について報告する。

1 はじめに

16世紀に南米からヨーロッパに伝えられたトマトは、当初はその赤い色から有毒と信じる人も多かったが、徐々に食用として受け入れられるようになり、イタリアでは18世紀末には多様なトマト料理が生まれた。

イタリアは、トマト食文化の発展とともに伝統的な産地である南部カンパニア州を中心にトマト加工業が興隆し、現在では米国、中国に次ぐ世界で3番目のトマト加工品生産国である。

同国のトマト加工品は、日本のトマト加工品輸入量全体の4割を占めている。

本稿では、日本市場で大きなシェアを占めるイタリアのトマト加工品の生産、輸出動向について、加工用トマトの生産状況と合わせて報告する。

なお、本稿中の為替レートは、1ユーロ = 116円（8月末日 T T S 相場：1ユーロ = 116.45円）を使用した。

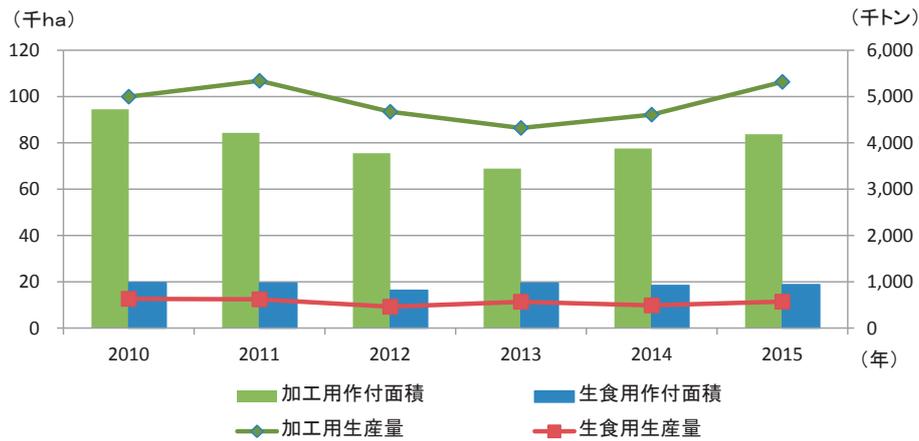
2 トマトの生産状況

（1）作付面積・生産量

イタリアは、夏の日差しが強く、年間を通じて降雨量の少ない地中海性気候にその大部分が属していることから、トマトの生産に適しており、北部のエミリア＝ロマーナ州、南部のプーリア州、カンパニア州を中心にトマト生産が非常に盛んである。

イタリアは、トマト全体（加工用・生食用の合計）の生産量では中国、インド、米国、トルコ、エジプト、イランに次いで世界第7位、加工用トマトでは米国（主産地はカリフォルニア州）に次いで第2位の主要な生産国となっている（世界加工用トマト協会、2013年）。近年、イタリアのトマト全体の作付面積は約10万ヘクタール、生産量は500～600万トンで推移しており、このうち9割を加工用トマトが占めている（図1）。2015年の加工用トマトの作付面積は約8.4万ヘクタールで、好天に恵まれたことにより、生産量は約530万

図1 イタリアのトマト作付面積・生産量の推移（用途別）



資料：イタリア統計局

トンと高い水準であった。

加工用トマトの生産は、EUの共通農業政策（Common Agricultural Policy：CAP）で最も手厚く保護されてきたこともあり、CAP改革の影響が最も大きいセクターの一つとなっている。

2001年、加工用トマトの生産者に対する1トン当たり34.50ユーロ（4002円）の補助は、果物・野菜分野の市場施策改革（EU規則1182／2007）により、生産と支払いを切り離すデカップリングが導入され、過去の支払い実績に基づいて支払い額が決まることとなった。イタリアでは、移行期間を経て、2011年までにデカップリングを完了することが義務付けられた。

加工用トマトの作付面積・生産量は、2011年から2013年にかけて、この市場改革の影響や、2013年春の悪天候による定植の遅れなどにより、約20%落ち込んだ。2015年1月以降、業界の要望を受けて、直接支払いを補完する独自の補助金として1ヘクタール当たり160ユーロ（1万8560円）の補助制度が導入されている。

後述する通り、2016年にはトマト加工品生産業者2社が、EUの補助金を利用し

てトマト加工品を不当に安く生産しているとして、豪州政府によるダンピング関税の適用決定を受けており、EUのCAP改革やトマト加工産業に対する保護政策の動向は、今後も生産や輸出に影響を与える可能性がある。

（2）主要産地

加工用トマト生産は、南部のプーリア州と、ポー平原が広がる北部のエミリア＝ロマーナ州が二大産地となっており、この二州で全体の7割弱を占める（図2、表1）。プーリア州ではフォッジア（Foggia）が、エミリア＝ロマーナ州ではピアチェンツァ（Piacenza）、フェラーラ（Ferrara）、パルマ（Palma）などが主要な産地である。その他ではロンバルディア州、シチリア州、カンパニア州などで生産が比較的多くなっている。2015年の作付面積では、エミリア＝ロマーナ州が最大で全体の30%を占め、次いでプーリア州が同26%、ロンバルディア州が同10%、シチリア州が同10%などとなっている。

カンパニア州、特にナポリからサレルノにかけてのアグロ・サルネーゼ・ノチェ

図2 加工用トマトの主な生産地域



資料：イタリア統計局の統計をもとに機構作成
注：数値は2015年の作付面積の割合。

リーノ地域は、伝統的な生産地域で、「レッドゴールド地区」と称されるほどトマトの産地として有名である。特に、イタリアにおける保護原産地呼称である Denominazione di Origine Protetta (以下「D.O.P.」という) に認定されているサン・マルツァーノトマトの産地として知られ、1980年代にはイタリア最大の生産地であった。しかし、1990年代にまん

延したキュウリモザイク病により生産が激減し、南部の主要産地はプーリア州に移り、加工用トマトの生産量では第4位まで順位を落としている。最近ではカンパニア州の生産量も徐々に戻ってきていると言われていたが、統計では顕著な増加は見られていない。ただし、伝統的なトマト産地として、いまだ多くの主要なトマト加工企業が所在している。

表1 加工用トマトの州別作付面積および生産量の推移

区 分	作付面積 (ha)						生産量 (千 t)					
	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
ピエモンテ	1,325	1,326	0	1,187	1,171	1,161	67	67	0	60	61	61
ヴァッレ・ダオスタ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ロンバルディア	7,948	7,158	6,471	5,588	7,207	8,168	552	508	430	319	463	513
リグーリア	6	14	13	0	0	0	0	0	0	0	0	0
トレンティーノ=アルト・アディジェ	6	6	6	5	6	6	0	0	0	0	0	0
ヴェネト	1,454	1,449	1,485	1,865	2,602	2,657	76	77	71	186	180	200
フリウリ=ヴェネツィア・ジュリア	30	33	21	29	26	0	1	1	1	1	1	0
エミリア=ロマーナ	25,892	25,054	22,510	20,098	24,681	24,791	1,637	1,760	1,555	1,390	1,641	1,630
トスカーナ	3,675	2,980	2,460	2,007	3,093	2,265	172	204	137	113	171	130
ウンブリア	928	938	683	680	690	678	67	68	34	40	40	8
マルケ	343	287	128	42	35	25	16	13	5	2	2	1
ラツィオ	1,810	1,874	2,215	2,280	2,180	2,270	133	136	126	167	88	107
アブルッツォ	1,106	1,099	1,099	1,104	1,114	1,115	52	51	53	53	54	54
モリーゼ	567	568	600	600	600	600	31	31	36	36	36	36
カンパニア	5,054	4,709	4,502	4,046	4,236	4,296	209	283	245	247	247	285
プーリア	26,373	23,409	22,430	18,540	19,160	22,000	1,469	1,696	1,653	1,369	1,280	1,847
バジリカータ	3,796	3,799	455	2,245	2,230	2,259	204	204	34	120	132	135
カラブリア	3,298	3,759	3,676	3,298	2,950	2,922	122	133	130	120	117	134
シチリア	10,360	5,360	5,358	4,860	5,150	8,125	170	88	88	82	80	149
サルデーニャ	543	503	232	426	408	408	20	20	9	17	17	29
合 計	94,514	84,325	75,525	68,900	77,539	83,746	4,997	5,340	4,671	4,322	4,609	5,317

資料：イタリア統計局

(3) 生産農場数

加工用トマトを生産しているのは、主に大規模農家か、農協の下で組織化された中小規模農家である。全体として、北部は、南部に比べて農場の規模が大きい傾向にあり、EUの農場データネットワークが収集したサンプルによれば、北部のエミリア=ロマーナ州の1戸当たり加工用トマト作付面積は12.9ヘクタールであるのに対し、南部のプーリア州では同4.4ヘクタールとなっている。なお、加工用トマトは、契約生産で行われている場合が多い。

2010年のイタリア統計局による農業セ

ンサスによれば、トマト生産農場数は、生鮮トマト生産が延べ2万5787農場、加工用トマト生産が延べ9564農場であった(表2)。生鮮トマトの約8割(2万102農場)が5ヘクタール未満の比較的小規模な農場で生産されているのに対し、加工用トマトは比較的規模が大きく、5~50ヘクタール未満の農場が全体の半分以上(5151農場)を占め、50~100ヘクタール未満が1割強(1137農場)、100ヘクタール以上の大規模農場も6%程度(607農場)存在している。

表2 トマト生産農場数(2010年)

作付面積 (ha)		0.01 ~ 0.99	1 ~ 1.99	2 ~ 2.99	3 ~ 4.99	5 ~ 9.99	10 ~ 19.99	20 ~ 29.99	30 ~ 49.99	50 ~ 99.99	100 以上	合 計
生鮮トマト	(露地栽培)	5,910	3,925	2,038	2,224	2,165	1,179	377	285	160	60	18,323
	(ハウス栽培)	2,526	1,762	838	879	775	419	120	85	36	24	7,464
	計	8,436	5,687	2,876	3,103	2,940	1,598	497	370	196	84	25,787
加工用トマト	(露地栽培)	735	713	479	742	1,353	1,573	989	1,236	1,137	607	9,564

資料：イタリア統計局「2010年農業センサス」

(4) 生産品種

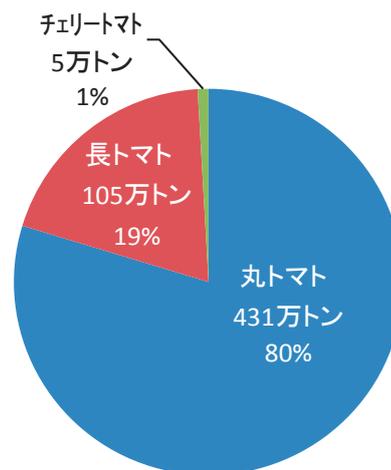
トマトは、加工向けにはリコピンが多く、味の濃いものが適している。リコピンは、トマトの赤い色素で、抗酸化作用を持つといわれている。トマト生産に適した地中海性気候で生産されるイタリア産トマトは、熱を加えることにより粘りのある独特のうま味が出ることから、特にトマトソースに向いているとされている。生食用トマトはジュース分が多いのに対し、加工用トマトは固形分が多く皮が厚いのも特徴の一つである。

イタリアで生産される加工用トマトは、主に丸い形をした丸トマト（イタリア語で「トンド」という）と長円筒形の長トマト（同「ルンゴ」）である。最も生産量が多いのは丸トマトで、2015年には約430万トンと全体の8割を占めた（図3、表3）。一方、主にホールトマトの生産に使われる長トマトは、同年には約100万トンの生産量であった。長トマトの生産は、主にイタリア南部で行われており、南部最大の産地であるプーリア州フォッジアやカンパニア州では主にこのタイプが生産されている。一方、北部の主要産地であるエミリア＝ロマーナ州のフェラーラやピアチェンツァでは、主に丸トマトの生産がされている。近年は丸トマトの生産が増加しており、2013年から2015年にかけては56%増となっている。その他では、ミニトマトの一品種であるチェリートマトが生産されている。

トマトは、1950年代以降多くの品種改良が加えられており、現在の加工用トマトのほとんどはF1ハイブリッド種である。イタリアで登録されているトマト品種は、約350あり、このうち約50品種がイタ

リアの種子市場で多く取引されている。D.O.P.にも認定されている伝統品種であるサンマルツァーノ（San Marzano）種や、パンアメリカン（Pan American）種とレッドトップ（Red Top）種を交配して作られたローマ（Roma）種などが有名な品種である。

図3 加工用トマトのタイプ別生産量(2015年)



資料：農業食品市場サービス協会（ISMEA）

表3 加工用トマトのタイプ別生産量の推移

(千トン)

タイプ	2013年	2014年	2015年
丸トマト	2,751	3,321	4,307
長トマト	1,279	1,506	1,048
チェリートマト	58	87	49

資料：ISMEA

(5) 生育ステージ

加工用トマトは、春先にグリーンハウス（育苗ハウス）で苗を生産し、4～6月に定植を行い、7～9月にかけて収穫するのが一般的である（図4）。トマト加工品の生産は、北部では7月下旬～9月中旬、南部では7月中旬～10月中旬に行われるのが典型的である。

トマトは、主に露地栽培で生産されており、2015年のトマト収穫量のうち、ハウス生産はわずか9%弱にすぎず、その約半

図4 加工用トマトの生育ステージ

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
加工用トマト			育苗	定植				収穫				

資料：機構作成

分がシチリアにおける生食用トマトとなっている。生食用の生鮮トマトは完熟前に収穫されるのに対し、加工用は完熟してから収穫するという違いがある。

南部と北部ではトマトの生育環境が大きく異なる。南部は、年間を通して比較的高温で、北部と比較して降雨が少ないため、配水管などの施設を用いて土壌表面に少しずつかんがい水を与え、水や肥料の消費量を最小限にする点滴かんがいを行っている場合が多い。一部機械による直播じかまきが行われているが、一般的には定植を行っている。収穫作業は、約7割が手作業で、多くの外国人労働者が収穫作業に従事しており、労働環境などが問題となっている（コラム参照）。ただし、南部でも機械化が急速に進んでいる（写真1）。

一方、北部は日隔差が大きいいためトマト生産に向いているとされる。主にスプリンクラーかんがいが用いられてきたが、点滴



写真1 南部におけるトマト収穫作業

かんがいも普及しつつある。南部同様、ほとんどが定植による生産で、直播きは1割程度である。また、植え付け、収穫ともに完全に機械化されている。

3 トマト加工品の生産状況

(1) 品目別生産量

イタリアは、トマト加工品の生産量では米国、中国に次ぐ世界第3位で、EU全体の約5割を占める一大生産国となっている。生産されたトマト加工品のうち国内で

コラム イタリア南部の移民労働者問題

2013年、ノルウェーの大手新聞社が、イタリア南部のトマト収穫作業における移民労働者からの搾取について取り上げたことをきっかけとして、ノルウェーの小売業者が中心となってイタリアのトマト加工産業における労働搾取に関する調査を行い、2015年に報告書が発行されている。これによれば、南部では、カポラリと呼ばれる仲介者がトマトの収穫期に主にアフリカや東欧地域の多数の外国人労働者を囲い込み、最低賃金以下で長時間労働に従事させている。例えば、プーリア州では12時間の労働に対する報酬がわずか25~30ユーロ（2900~3480円）で、うち5ユーロ（580円）がカポラリに手数料として徴収されている。

こうした問題は、ヨーロッパや豪州など主要な輸出先のメディアでも大きく取り上げられ、イタリアのブランドイメージに少なからぬ影響を与えている。

消費されるのは4割で、残りの6割はEU域内、米国、日本を中心に世界各国へ輸出されている。

トマト加工業は、伝統的な産地であるカンパニア州、ナポリを中心に18世紀後半から発展した。トマト缶の生産が始まったのは1800年代で、完成品が1878年のパリ万博で紹介されたことが記録されている。元々はホールトマトのみが生産されていたが、その後トマトピューレなど他の加工品が生産されるようになり、立方形に切ったダイストマトやそれをさらに細かくしたポルパフィーネなどが生産されるようになったのは比較的最近である。

収穫されたトマトは洗浄され、蒸された後、皮むきが行われ、その後パルプ（トマト果実。ホール、ダイス、ポルパフィーネなどさまざまなサイズがある）、ピューレ、ペースト、ソースなどに加工される。ホールトマトは長トマトから、ダイストマトは丸トマトから、それぞれ生産される。

南部はホールトマトの生産が多く、北部ではダイストマトのほか、トマトピューレなど幅広く生産されている。南部のトマト加工業者団体である野菜ジャム協会（ANICAV）によれば、2009年に加工向けに使用されたトマト約490万トンのうち、トマトピューレなど濃縮トマト向けが46%、固形トマト向けが26%、その他が29%であった。州別では伝統的にホールトマトの生産を行ってきた南部カンパニア州の処理量が多く、全体の約5割を占め、そのうち約半分が固形トマト向けである（表4）。一方、北部の主要産地であるエミリア＝ロマーナ州の処理量は、全体の36%を占め、そのうち64%が濃縮トマト向けである。

イタリア産のホールトマト缶は、既に確立された輸出市場を有しており、ブランドとしての認知度も高く、世界のトマト加工品の需要拡大も背景に今後も安定的に生産が行われると予想される（写真2）。その

表4 州別のトマト加工品別トマト処理量（2009年）

(t)

州名	濃縮トマト	固形トマト	その他	合計
ロンバルディア	120,353	0	14,727	135,080
トレンティーノ＝アルト・アディジェ	2,372	0	7,405	9,777
ヴェネト	0	0	1,716	1,716
エミリア＝ロマーナ	1,115,709	10,964	620,424	1,747,097
トスカーナ	50,015	2,711	854	53,580
マルケ	67	6,278	10,432	16,777
ラツィオ	93,214	5,366	28,780	127,360
アブルッツォ	7,461	2,735	16,953	27,149
モリーゼ	6,403	6,742	2,993	16,138
カンパニア	700,133	1,158,540	652,359	2,511,032
プーリア	42,552	26,780	15,717	85,049
バジリカータ	26,752	14,838	11,521	53,111
カラブリア	62,536	346	1,879	64,761
シチリア	3,661	0	2,008	5,669
サルデーニャ	15,072	14,800	13,584	43,456
合計	2,246,300	1,250,100	1,401,352	4,897,752

資料：ANICAV

中であっても、北部地域はトマトペーストなど、新しい製品の開発に取り組んできた経緯や、さまざまな食品産業を擁する地域性も相まって、パスタソースなどにも関心を持っているため、今後製品構成が多様化していくことが見込まれている。



写真2 イタリア産トマト加工品の販売の様子

(2) 主なトマト加工品生産業者の動向

イタリアのトマト加工業は、年間30億ユーロ（3480億円）を産出し、約1万人を雇用する一大産業である。トマト加工業の産業構造は歴史的に地域で異なり、南部にはカンパニア州を中心に中小メーカーが多く所在していた。一方、北部は以前から比較的少数の大企業が中心であった。

南部は、元々家庭内手工業からスタートしたような農協系の企業が多く、かつては200社程度あったのが、統廃合が進んで現在は80社程度と大規模化が進んでいる。主要企業としては、PIA（元ARIA）、La Doria Group、Giaguaro Groupなどがあり、これら大手のトマト処理能力は、年

間30~40万トンで、主にホールトマト、ダイストマトを生産している。前述のとおり南部最大のトマト産地はプーリア州フォッジアであるが、加工メーカーは伝統的なトマト産業地域であるカンパニア州に集中している。フォッジアからカンパニア州ナポリに続く道は「トマトの道」と呼ばれ、収穫期を迎える夏には、フォッジアからナポリに向けて大量のトマトがトラックで輸送される光景を目にすることができる。

一方、北部は、大企業が中心で、エミリア＝ロマーナ州を中心に40社程度が、トマトペーストやダイストマトを中心にEU域内向けに生産している。エミリア＝ロマーナ州は、ハムや乳製品の産地として有名なパルマ県を擁していることから、これら加工品生産のための食品機械工場が集まっており、トマト加工機械もパルマ県で開発されたものが多い。従来、加工業務用がメインであったが、家庭向けも生産するようになってきており、最近是一般家庭向けパスタソースなども多く生産している。主要企業として、農協系のCasalasco、Conserve Italia、Copadorのほか、老舗企業のMuttiなどが有名である。年間のトマト処理能力は、Casalascoが最大で55万トンとなっており、その他大手では10~35万トン程度である。

南部および北部の主要なトマト加工企業の概要は表5のとおりである。

表5 主要なトマト加工企業

名称	所在地	年間処理能力	概要
南部			
PIA (Princes Industrie Alimentari Srl)	プーリア県 フォッジア	約 40 万トン	<ul style="list-style-type: none"> 2012年、英国の食品・飲料大手のPrinces社が長くパートナー関係にあったAR Industrie Alimentari SpA (ARIA) 社を買収して設立した新会社。 2009年に設立されたARIAの12万平方メートルの加工工場をそのまま引き継ぐ。 ヨーロッパで最も近代的な工場の一つとされる。 北米、南米、オセアニア、ヨーロッパ、アフリカ、アジアなど世界各地にトマト加工品を輸出。
La Doria	カンパニア州 アングリ	約 30 万トン	<ul style="list-style-type: none"> 1954年、伝統的なトマト生産地域であるアグロ・サルネーゼ・ノチェリーノで設立された企業。 7つの工場で、トマト加工品のほか野菜缶詰や果物ジュースを生産。 英国にある系列の貿易会社を通じ、世界各国に製品を輸出。
Giaguaro Group	カンパニア州	約 30 万トン	<ul style="list-style-type: none"> 1978年設立の家族経営企業。 世界 40 カ国以上に輸出。
北部			
Casalasco (Consorzio Casalasco Del Pomodoro)	ロンバルディア州 クレモーナ	約 55 万トン	<ul style="list-style-type: none"> 1977年設立の農協系企業。 370農家から成り、7000ヘクタールの農場でトマトを生産。 2012年にイタリア食品大手のBoschi Food & Beverageを、2015年に北部の農協系主要企業ARPを買収。 現在、ヨーロッパで3番目に大きいトマト加工企業。
Conserve Italia	エミリア＝ ロマーナ州 ボローニ	約 34 万トン	<ul style="list-style-type: none"> 1976年、農協の販売組織として設立された農協系企業。 ヨーロッパ最大の農業・食品企業の一つで、グループ全体で年間約 57.5 万トンの果物・野菜を加工生産。 イタリアに8工場、フランスに2工場、スペインに1工場。 組合員が生産した作物を集荷し、それらを原材料として工場缶詰や飲料に加工・販売する垂直統合経営を実施。 年間売上高は 9.6 億ユーロ (1113 億 6 千万円)。トマト加工品は売上高の 21% を占める。
Copador	エミリア＝ ロマーナ州パルマ	約 35 万トン	<ul style="list-style-type: none"> 1987 年設立の農協系企業。 経営難から 2012 年に主要ブランドの Berni を売却。
Mutti	エミリア＝ ロマーナ州パルマ	約 10 万トン	<ul style="list-style-type: none"> 1988 年設立の老舗の家族経営企業。 1950 年代にチューブ状のトマトペーストを発売するなどトマト加工産業のバイオニアとして知名度は高い。

(3) 原料の調達動向

イタリアは、トマト加工品の主要な輸出国である一方、米国やスペイン、中国などからトマト加工品原料を輸入している(図5)。

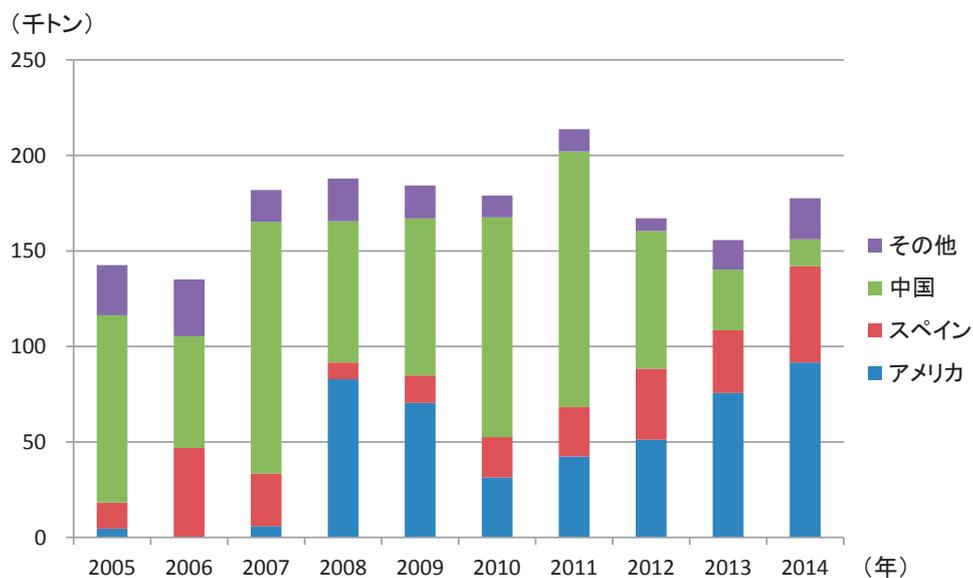
EUでは、中国からのトマト加工品原料の輸入拡大と、国内の生産者への影響を危惧したトマト加工業界による強い働きかけもあり、2011年に原料原産地名の表示を義務付けるEU規則が施行された。この新たな規則の導入と人件費の高騰や天候不良を背景とした中国産トマトの値上がりなどにより、中国からのトマト加工品原料の輸入量は、2011年の13.3万トンをピーク

に激減し、2014年にはわずか1.4万トンとなっている。一方、米国産のトマト加工品原料の輸入量は中国産を代替する形で急増し、2014年には約9万トンが輸入された。

なお、中国産のトマト加工品原料が多く輸入されていた5～6年ほど前には、安い中国産原料を加工してアフリカに輸出するビジネスが一部で行われていたが、中国からの原料輸入の減少に伴いこうしたビジネスは縮小している。一方、一部報道によれば、南部において、引き続き、中国産トマト加工品(トマトピューレなど)の輸入品は、固形トマトの充填液や、トマトピュー

に再加工され、そのほとんどがイタリア産としてEU域内に輸出されている。

図5 トマト加工品原料輸入量の推移



資料：国際貿易センター（ITC）

以上、本稿ではイタリアにおける加工用トマトとトマト加工品の生産状況を中心に

報告した。次号では、同国におけるトマト加工品の輸出動向について報告する。